校長室だより～燦燦～ №１５

校長先生のお話

2019.11.29

私が緊張をコントロールして人前で話すことができるようになったのは、その要因を分析してみると、梁川高校の生徒たちのおかげであることに気づかされた。

４月の入学式校長式辞はよかった。ところが、入学式翌日の対面式での校長の話で、私はかなりの衝撃を受けることになる。そうなることはある程度予想はしていた。高校生が校長の話など本気で聞いてくれるはずがない。「校長の話＝長い」くらいに思っているだろう。ネガティブな考えが浮かんできた。

最初なのでとりあえず無難な内容にしてみた。それもよくなかったのかもしれない。とにかく話しづらかった。話をするのが苦痛だった。最初から話を聞こうとはしていない。こんなに話をしにくい状況にあうのは久しぶりだった。後で考えてみた。今までの私はかなり恵まれていたことがわかった。

福島県教育センター時代。研修にきている若い先生方の前で話すのはよかった。何かを吸収しようとして聞いてくれるので話しやすかった。小学校の校長時代。子どもたちは、いつでも私を吸い取るかのように集中して話を聞いてくれた。再び福島県教育センター時代。研修にきている先生方の前で話すのである。最初からこちらにアドバンテージがある。特に小学校の先生方は話しやすかった。うなずきながら豊かな表情で聞いてくれた。計８年もの間、大変話しやすい環境の中に置かれていたことがわかった。

そして、梁川高校の生徒たち。校長の話に期待をしていないことがわかった。それはそうである。そのときの私は、彼らにとって魅力的な話ができなかった。これが１年間続くのは許せなかった。話を聞いてもらえないのは、聞く方にも多少の問題はあったとしても、一番は話している方に問題がある。話がつまらない。長い。これでは聞く気にもなれない。これは授業も同じである。教員の中には、生徒が話を聞くのが当たり前と思っている方もいるだろう。そういう考えもあるが、生徒の側になって考えてもらいたい。毎時間、つまらない、わからない話を一方的にされては、苦痛、退屈以外の何ものでもない。

５月１７日の３学年進路ガイダンス、校長としての話はいつも短く簡潔にしているが、このときも生徒は無表情だった。またしても敗北。さすがに真剣に考えた。「このままではいかん」聞いてもらえないと余計に緊張感が増す。だが、緊張などしている場合ではない。６月６日の校内球技大会、まだ変化がない。また落ち込む。もはや１学期は、７月１９日の第１学期終業式しかない。うまくやろうとか過度に聞いてもらおうという気持ちを捨てた。すると、緊張もしなくなった。内容も生徒が身近に感じること、私の高校時代、高校３年生の私の娘の話などを用意した。話すだけでは伝わりにくい難しい言葉は、Ａ３の用紙に言葉を書いてその場で見せるようにした。それでも話は長くならないように、話の構成を何度も練り直した。

そして、７月１９日を迎えた。話を始めた。すると明らかに今までよりも興味を示している。内容にランキング方式や三択を取り入れた。娘が高校３年生だということを話したところ、女子生徒が反応していた。その場で出したＡ３の言葉も見ている。まだまだ全員というわけではないが、明らかに変化があった。私の目標は、「あの校長は次はどんな話をするのだろう」と期待感をもたせることである。

７月１９日、ようやく風向きが変わった。本当の勝負は２学期である。